

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00882

研究課題名（和文）PICTの学際的理論融合化と英語授業応用モデルの構築

研究課題名（英文）Organic Theorization of PICT Anchored in Interdisciplinary Integration and Its Application in English Teaching Methodology

研究代表者

金岡 正夫（KANAOKA, MASAO）

鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・教授

研究者番号：00311118

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：Ema Ushioda の英語動機づけ理論(CDST) とそれを基盤にした大学英語授業への応用モデルの構築にむけ、この理論の学際的融合（他領域との理論的融合）に着手した。理論構築作業、パイロットスタディを経て授業モデルを構築し、大学授業で導入し、教育効果を検証し、学会発表を行った（JACET国際大会）。4年目はシンポジウムを開催した（JAAL in JACET）。成果報告書も作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Ema Ushiodaの英語動機づけ理論（PICT, CDST）の研究と応用実践については応用言語学と外国語としての英語教育の世界に限られていた。そこに人格形成、スピリチュアリティといった教育学と心理学、さらには公共哲学（政治学と倫理学と哲学）という別の学域を巻き込むことで、彼女の動機づけ理論をより正統的（学際的）な観点から検証することを試みた。同時その融合モデル（理論構築）を作りあげて大学英語授業に還元していくことは、教育ならびに学術的に意義がある。加えて大学英語を取り巻く流れに新たな視点（例：英語学習スタイルの見直し）を差し込むことができた。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on Ema Ushioda's (2015) L2 motivation theory, i.e., Complex Dynamic Systems Theory (CDST) and aims to construct its application model by employing university English classes. Research rationale pertains to forging a tangible model of interdisciplinary fusion, such as CDST = PICT + spirituality + character forming + public philosophy, started to transform. The first year was utilized in building a theoretical framework prior to following classroom-based pedagogical implementation. Second year was used for pilot study using college EFL classes for a one-semester period. The third year was spent for examining teaching and learning effects from the pilot study and follow-up classroom-based actual teaching practices, also for conference presentation. The final year was employed for symposium, also for wrapping up the whole content of the project via research reports.

研究分野：英語教育（カリキュラム、学習者自己形成、教授法）

キーワード：英語学習者 自己形成 動機づけ スピリチュアリティ 人格 公共哲学 叡智 大学英語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

動機づけ研究の視点は英語能力・学習という狭いレンジをこえ、真正性と正統性をもつコンテキスト(学習文脈)に重点を置こうとしている。そこから成熟した自己性と言語使用を学習評価としてみようとしている。それが Person, Agency, Sense of Self (and Identity) といったキーワードで示される一方で、その先にある character, spirituality の解明をどうするのか。それを支える context はどうなるのか。この解決の手がかりとしてスピリチュアリティと Ushioda 博士の動機づけ理論を重ねてきた。具体的には Ema Ushioda (2015) の Complex Dynamic Systems Theory (CDST) の理論整備であり、その先鞭となる Ushioda (2009) Person in Context Theory (PICT)、spirituality (価値観、信念を軸にした自己内面性の成熟)、青年期における character forming (人格形成)、倫理、共通善、正義など文化的特性に関わる public philosophy (公共哲学)、以上の複合学際領域の理論的融合による CDST の具現化をめざし、そこに研究価値(独創性)を位置づけた。

2. 研究の目的

[理論的領域]

(1) 前回採択研究課題「スピリチュアリティと自己決定理論による英語学習自律化メカニズムの理論構築」(基盤研究 C: 2016-2018 年度、課題番号 16K02846) の理論整備に着手し、(2) CDST の理論精査(定義、理念、着想背景、教授メソッドの留意点)に向けた PICT - CDST の理論系譜の整理作業(2つの理論の内容系統化)、(3) PICT - spirituality - character forming - public philosophy の学際領域の理論整備と融合モデルの構築、(4) CDST = PICT + spirituality + character forming + public philosophy を基盤にした英語学習動機づけ・自律化の理論構築、(5) CDST = PICT + spirituality + character forming + public philosophy を基盤にした英語学習動機づけ・自律化の理論構築、(6) 理論体系の全体的な見直し(考察と修正)と同時に日本人大学生へのアンケート調査をした(理論体系の内容をもとにした問題点の検証: 回答結果の考察をふまえた理論的修正)。

[臨床(実証)的領域]

(7) 上記の理論作業をベースにした大学英語授業のデザイン化(カリキュラム、教授法、学習方法・プロセス)、(8) パイロットスタディ(e.g. 大学1年生対象: 半期英語授業を利用)として自己成熟、言語的成熟、学習動機、学習自律化の変化・成長を調査・分析(事前・事後、量的、質的手法 インタビュー含む)、(9) その検証をふまえた理論体系の再構築(授業・学習実践上の新たな知見の追加)、(10) 理論編と臨床編による新たな学習動機づけ 学習自律化メカニズムの提示をし(日本人大学生 EFL learners を対象)、成果報告書に着手した。

3. 研究の方法

本研究は3年計画で行った。1年目(R1)に(a) CDST の理論的精査(定義、理念、着想背景、教授メソッド応用における留意点)、(b) PICT - CDST の理論系譜の整理(2つの理論の内容系統化)、(c) PICT - spirituality - character forming - public philosophy の学際領域の理論整備と融合モデルの構築(英語の学習動機づけ・自律化、自己の内面的成熟、人格形成、公共哲学の学際的統合)に取り組んだ。2年目(R2)に(d) CDST = PICT + spirituality + character forming + public philosophy を基盤にした理論構築と大学英語教育への応用モデル(教授法)の構築、(e) この理論をベースにした大学英語授業を利用したパイロットスタディの導入・検証・課題点(改善修正点)の精査に取り組んだ。3年目(R3)に(f) CDST の総合的理論構築および応用実践(本格的検証 授業の利用)・効果の検証(教育および学習領域)、(g) 問題点(限界点)と今後の研究示唆(改善・克服点)を洗い出し、(g) 総括として研究成果報告書に取り組んだ(註: 延長の4年目 R4 を含む)。

4. 研究成果

Ushioda 理論の特徴は 1) 自己性 (self) とアイデンティティ (identity)、2) 英語学習世界の真正性 (authenticity)、3) 内面世界(精神性)の成熟 (maturity of spirit)、4) 状況 (situation) ではなく文脈 (context) の重視、5) 自己形成 生きていく現実社会 言語(学習・教育)の存在意義の三位一体化、以上のつながりを重視した教育・学習観にある。そこでは意味論 (ontology)、価値論 (axiology)、目的論 (teleology) の有機的つながり (organic amalgamation) が基底要件となっている。グローバリズムによるモノと人の流動化は経済・政治面(外面)だけでなく、生き方、価値観、信念など、人生哲学と社会哲学(内面)に係る問題を複雑で、出口の見えないものにしていく。このグローバルな課題と社会文化の本質論を交錯させ、そ

の座標軸から英語教育・学習の存在意義（レゾナードル）を問い続けていくうえでも spirituality、character forming、public philosophy は密接につながる学際領域でもある。こうした観点を融合させた大学英語授業モデルの理論的な構築のみならず授業に結びつけた応用実践、そして被験者からのフィードバック（授業評価を含むアンケートの実施と回答結果の分析、考察、今後の研究示唆など）を系統的に打ち立てて実施することができた。そして新たな英語授業メソッドについて、教材開発を含めて立ち上げることができた研究実績は大きな意味をもつ。

今回の研究課題、研究手法、そして研究成果は、大学英語教育や外国語としての英語教育、さらに応用言語学の領域に係る学術論文、学会紀要、研究発表などにおいて、これまでみられなかった独創的な立場を有している。その教育的な意義と研究価値はこれからの新たな英語科教育教授法、英語教育カリキュラム、学習動機づけ理論の構築と応用実践に向けて、有益な知見と情報を提供している媒体となるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 KANAOKA, Masao	4. 巻 64
2. 論文標題 A Pedagogical Attempt to Transform L2 Learning Strategies, Enhance L2 Use Capability, and Foster Solid Mindset of Medical Students: Embracing Tripartite Development toward the Maturity of Person	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JACET JOURNAL	6. 最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32234/jacetjournal.64.0_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金岡正夫
2. 発表標題 教科のための英語 vs. 人格的成長をめざした英語
3. 学会等名 鹿児島県小学校外国語活動・外国語科研究会令和元年度10月定例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masao KANAOKA
2. 発表標題 Seeking 'matured' L2 learning style mediated by spirituality, character forming, public philosophy: Toward authentic self-growth and 'well-being' English as an organic entity
3. 学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention (Online)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金岡正夫、佐々木実、江利川春雄
2. 発表標題 日本の経済政策と英語教育の同調的動きに対する検討 大学教育の普遍的価値の再認識に向けて
3. 学会等名 JAAL in JACET 2022（シンポジウム）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金岡正夫、米岡ジュリ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 112
3. 書名 Medical Ethics: Seeking Self-Growth with English (メディカルエシクス 自己成長を目指す英語の実践)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------